「 アフガン援助活動の中から 」

アフガン友好協会代表 西垣敬子先生

アフガニスタンの概要

面積 64万7500平方キロメートル(日本の17倍)

人口 推定 2500 万人 (1978 年 1500 万人)

地勢 70%が山岳地帯 耕地は全地表の12%のみ

乾地農業と潅漑農業(小麦、大麦、じゃがいも、トマト、なす、きゅうり、いちぢく、ざくろ)

牧畜 羊、山羊、馬、牛、ろば。犬。鶏

パシュトン (南) の遊牧民

クロ山羊の毛のテント

非パシュトン(北)の遊牧民

円形のテントーユルト

保健 健康状態は世界で最も厳しい

平均寿命: 男性 43 歳 女性 44 歳

英国の40倍、パキスタンの3倍

新生児死亡率:死産は千人のうち250~270人

助産婦等の立ち会いでの出産は6%以下

教育 女性の識字率 13.5% 男性 45.2%



産科のケアが受けられる者 10%、

専攻が仏教美術ということもあってアフガニスタンはずっと行ってみたい、と思っていた 国でした。行ってみるとそこには難民が大勢いました。

自分も台湾から終戦後ひき上げてきて苦労した思いが有り、少しは難民の気持ちが判るというか難民としての下地があったように思います。

アフガニスタンはイスラムの国で、1994 年始めて行ってみると女性の地位が低く、外に出ることも出来ません、戦争で夫をなくすと配給の列にも並ぶこともできないのです。かわりに小さな男の子が並んでいるのを目にしました。そういう実態を見てしまうと私は放っておけないのです。ここからが私の活動の始まりでした。以後毎年アフガンに入っています。行くたびに状況が変わっているので、活動内容もいろいろと多岐になっていきました。

アフガンは、Civil war といわれる国家間同士の戦いで戦禍にあった人々は、国内を逃げまどわなくてはならないのです。国連機関では国内避難民(IDP)と呼ばれています。難民とは国の外に出た人々をいうのであって、国外へでるのは恵まれた人たちです。首都のカブールが戦場になり、1日に7千人ぐらいが逃げてきます。テントは国連が用意していますが2月後ぐらい待たないと入れません。そんな時、赤ちゃんが死にかけていて、ミルクも薬もない、と言うことを聞いて、日本に帰って用意をしょうと帰りました。

ところが、1995年1月7日、阪神淡路大震災に遭って、それどころではなくなってしまいました。それでも何とかしなくてはと思い寄付を募って、集まった四千ドルを持って、1



年後の11月に現地入りをしました。

さあ、これで子供達が生き延びられる、と思っていたところ、 50度にも達する夏の暑さで多くの乳飲み子達は命を落としてい ました。砂の大地に枯れ木をさし、細い布切れを巻き付けただ けの墓を見たときは言葉がでませんでした。

持参した4千ドルは女性と子供達のために使おう、とまずは 青空教室のテントを隣国パキスタンへ発注して、残った2千ド ルは日本で文房具を購入しました。

次の年、テントが届いているか、確認のため現地へ向かいました。テントはちゃんと届いていました。この時、<u>確認する</u>と言うことの大切さを学びました。

女性は外にでられない、働くこともできない、夫が亡くなった後はお金がないので子供を育てることができません。子供達

は母親がいても孤児院に預けられます。女性達はテントにこもったまま出てこられません。

そこで次に洋裁教室を開くことにしました。洋裁の出来る人を探してきて、ミシンは パキスタン側の国境の町で購入しました。

以前にアフガニスタンのキレイな刺繍を子供達の洋服でみたことがあり、一日中テントの中で暮らす女性達に刺繍ができるようにと、朝日新聞、神戸新聞に記事を載せてもらったところ、おおきな反響をよび日本各地より提供がありました。それらを船便と航空便で送ったところ、紛失や抜き取りがありました。現地で購入すればちゃんと届いているか、という心配もないし、商人も潤うしお金もまわる。現地で調達するのが一番いい方法だと痛感しました。

一緒に作業をしていると写真を撮らせてもらったりも出来ました。アフガンの女性は 外出の時はブルガですっぽり身を包み、写真を撮ることは出来ません。相手国の習慣や宗

教に経緯を払わないと受け入れてくれなく、 心を開いてくれません。写真に写っている 顔は、笑顔で美しい。

アフガンは子たくさんで8人~13人という家庭もありますが、5歳までに栄養失調と小児麻痺等で亡くなってしまいます。それでも働き手が要るため多く産むのです。産湯も使わない、血をぬぐって終わりという厳しい状況です。電気は夜のみです。でも女の子が生まれると刺繍をためておき子供達の服を飾っています。



また、地雷で両方の足を吹き飛ばされた少女に義足の援助や、タリバーン時代の隠れ 学校の女性教師達に給料の援助、大学の構内に女子トイレの建設、このトイレ建設は女 子学生から大変喜ばれました。その他 40 メートルの井戸を掘ったり、女子寮の建設など、 日本から遠い国で人が好き、という思いから 24 年間続けてきました。

今後はアフガンのいいところに眼を向けて、良き紹介者になりたいと思っています。

(文責 坂本)